『語用論研究』第 14 号(2012 年) pp. 20-36
© 2012 年　日本語用論学会

日本語名詞句トートロジー「A も A だ」の認知語用論的研究

山　本　尚　子
奈良大学

This paper discusses the meaning of the Japanese nominal tautology *A mo A da* within the framework of relevance theory. Moriyama (1989) and Okamoto (1993) claim that *A mo A da* has such negative meanings as *unusual* (*anomalous*) and *undesirable*. However, a detailed observation proves their claims to be incorrect. I argue that the meaning is stipulated as follows: *A mo A da* must be processed in such a way as to evoke an assumption about the referent of the subject *A* that provides one of several explanations for the state of affairs that is under discussion at the utterance point.

キーワード：　トートロジー、関連性理論、手続き的情報、「A も A だ」

1. はじめに

名詞句トートロジーという表現形式は、ほとんどの言語に存在するが、その表現方法は異なっている。一般的に、英語の名詞句トートロジーは、A is A という単一の形式で表される。一方、日本語では、「は」、「が」、「も」の区別があるため、名詞句トートロジーとして、「A は A だ」、「A が A だ」、「A も A だ」という 3 つの形式が存在し、かつ伝達する意味はまったく異なる。このような事実を踏まえると、日本語の名詞句トートロジーについて考える場合、これら 3 つの表現形式を視野に入れ、その全体像を考える必要があるように思われる。

しかしながら、従来の日本語名詞句トートロジー研究では、先に示した 3 つの表現形式の区別を念頭においた研究の重要性がさほど意識されることなく、主に「A は A だ」の分析の方に精力が注がれてきた。そのため、「A が A だ」や「A も A だ」に関しては、まだまだ手つかずのところがあり、それらの意味解釈にまつわるどの部分が未解決であるかさえもはっきりとしていない。

本稿では、「A も A だ」に関する先行研究を検討し、Sperber and Wilson (1986,

* 本稿の修正にあたり、匿名査読者の先生方には、詳細で貴重なコメントを数多く頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

1995[2]）によって提案された関連性理論の概念を用いて、「A も A だ」[1] が持つ意味（コード化された意味）は何かを考察する。

2. 先行研究検証

「A も A だ」に関する研究の数は極端に少ない。その上、たとえ「A も A だ」に関する提案があったとしても、その記述はあまり詳細なものではなく、はっきりと明示されていない点も多い。そのため、まず先行研究が何を意図しているかを正確に認識することが、今後の研究の方向を左右する重大な点であるように思われる。本節では、森山（1989）と Okamoto（1993）を概観し、その問題点を明らかにする。

2.1. 森山（1989）

森山（1989）は、「A も A だ」は「普通ではない（異常な）」事態の並列を意味すると言う。次の例は、森山が「A も A だ」の例として挙げているものである。

（1） a. 教師が教師なら、学生も学生だ。
　　 b. 教師が教師だし、学生も学生だ。　　（森山 1989: 7, 表記方法一部修正）

（1a）と（1b）はともに、従属節を伴う「A も A だ」である。森山の考え方によると、「A も A だ」は、基本的には「A が A だ」の延長線上にあり、「X が X なら、Y も Y だ」（(1a)）や「X が X だし、Y も Y だ」（(1b)）の後半部分が独立したものである。また、「A も A だ」は、「A が A だ」と同様、意味的にも、「特定状況における普通でない在り方を問題にしている」（森山 1989: 8）。以上の点を踏まえ、森山は、「A も A だ」の意味は「普通ではない（異常な）」事態の並列であると主張する。

---

[1] 本稿では、名詞句トートロジーという要素しか関与していない「A も A だ」の例（他の文に埋め込まれることなく単独で生起する「A も A だ」と、原因・理由を表わす「から」を伴うが、後件部分が言語化されていない「A も A だ」）を考察対象とする。また、「A も A だ」において、A は、名詞あるいは名詞句を意味する。

2.3.1. 節で詳しく議論するが、本稿の考察対象は、先行研究である森山（1989）や Okamoto（1993）の考察対象（従属節を伴う「A も A だ」）と異なる。この点に関して、形が変われば意味も変わるという考えに従えば、従属節を伴う「A も A だ」と単独の「A も A だ」にはそれぞれ異なる用法があるという結論に至るであろう。しかしオッカムのかみそり原則があるので、例えば bank のように、まったく起源の異なる二つの語の形がたまたま一致したというような理由がない限り、まずは、「A も A だ」という一つの形に一つの意味があると仮定するべきだと考える。

2.2. Okamoto (1993)

Okamoto (1993) は森山と同じく、「AがAだ」との類似性に言及しながら、「AもAだ」は、問題となっているAが望ましくないことを伝達するが、その他にも望ましくないものが存在することを前提とする、と言う。すなわち、「AもAだ」は「望ましくない」ものの並列を意味するのである。具体例を見てみよう。

(2) [年配の男性が、若い既婚男性と独身女性が簡単に不倫をすることを非難している。]
男も男なら、女も女だ。一体彼女たちは嫁に行ってから、どんな家庭を作るのだろう。

(3) 親が親だから子供も子供だ。

(4) あなたもあなたよ。[2] (Okamoto 1993: 451–452, 日本語表記引用者)

Okamotoの分析によれば、(2) では、男性と女性がともに望ましくないと見なされる。(3) の後半部分「子供も子供だ」は、親と同様、子供も立派ではないことを示唆する。また、成句である (4) は、「あなた」に加え、非難されるべきだれかほかの人がいることを前提とし、「あなた」を非難するために用いられる。

2.3. 森山、Okamotoが考える「AもAだ」

2.3.1. 「AもAだ」とは何か？

以上、「AもAだ」に関する議論を見てきたが、森山やOkamotoの分析には重なる部分が実に多い。その点を簡潔にまとめると (5) のようになる。

(5) a. 従属節を伴う「AもAだ」を考察の対象とする。
b. 「AもAだ」は、主語Aの指示対象が、マイナスの特性（「普通ではない（異常な）」、「望ましくない」）を持つことを伝達する。
c. 「AもAだ」は、主語Aの指示対象のほかに、マイナスの特性を持つものが存在していることを前提とする。

このように、両者の分析には大きな隔たりはなく、「AもAだ」に関する議論はある一定の方向に収束するかのように思われるかもしれない。しかし、それらは本当に「AもAだ」の総合的な説明と見なすことができるだろうか。事実を注意深く観察すると、森山とOkamotoの提案は、「AもAだ」の解釈プロセスのほんの一部分しかとらえていないこと

[2] Okamotoは、「あなたもあなたよ」を成句ととらえている。このことから、彼女が、この例には文脈に左右されない固定化された意味があり、具体的な文脈がなくとも解釈可能であると考えていることがわかる。

がわかる。彼らの分析ではうまく説明できない点を明らかにするために、まず彼らが扱う例とそうでない例がそれぞれどのようなものであるかを明らかにする。

すでに (5a) で確認したように、森山や Okamoto は、「AもAだ」の例として、従属節を伴うものを挙げている。具体的な例は、次のようなものである。便宜上、(6)-(8) として再掲する。

(6) a. 教師が教師なら、学生も学生だ。 (= (1a))
　　b. 教師が教師だし、学生も学生だ。 (= (1b))
(7) 男も男なら、女も女だ。 (= (2))
(8) 親が親だから子供も子供だ。 (= (3))

一方、彼らが挙げたデータには、次のような、他の文に埋め込まれることなく単独で生起する「AもAだ」(以下、単独の「AもAだ」とする。) の例は欠けている。

(9) [ある夫婦が、太郎という少年とその父親について話をしている。父親はもめごとをよく起こすことで有名である。]
　　妻： 太郎君がまたクラスメイトとけんかしたんだって。ほんとに、やんちゃな子よね。
　　夫： まあ、親も親だからな。
(10) 杉山邦博や内館牧子はどの場所で顔を見ても驚かないが、毎回荒れる3月の大阪場所は大村昆、林家ぺー、京唄子などは常連なので楽しみだ。知らなかったのだけど、料理人の神田川俊郎は正面勝負審判席の間に座っているという。場所も場所だ。皇室でさえ安全を考えてタマリ席には座れない。人柄が偲ばれるところだ。 (http://punkhermit.jugem.cc/?eid=2055)

以上より、森山や Okamoto が扱うデータは、「AもAだ」という形式を持つデータの一部であることがわかる。森山が考えるように、「AもAだ」が「XがXなら、YもYだ」や「XがXだし、YもYだ」の後半部分が独立したものであるならば、その後半部分が独立したものは、形式上は、単独の「AもAだ」と同一のものと見なせる。そうすると、前節で概観した従来の分析が単独の「AもAだ」の例をどれほどうまく扱えるのか、ということに関して疑問が生じる。

この点を議論する前に、まず従属節を伴う「AもAだ」とは何かを考えてみよう。森山も Okamoto も、どのような「AもAだ」を考察の対象とするかについては何も述べていない。しかし、彼らが議論の的としている例を再考すると、その特徴が浮かび上がってくる。次の例をもう一度思い出してみよう。

(11) 教師が教師だし、学生も学生だ。 (= (6b))

(12) 親が親だから子供も子供だ。 (= (8))

これらの例が示している最も注目するべき点は、「が」、「も」という助詞の違いはあるが、「AがAだ」、「AもAだ」という同語反復表現形式をそれぞれ、従属節、それと結びつけられる主節で用い、かつ、同語反復される部分に、「教師」と「生徒」((11))、「親」と「子供」((12)) といった、両者が相互関係にある語を用いることで、対句的な表現になっているということである。

次に注目するべき点は、従属節では、「AがAだ」だけではなく、「AもAだ」も用いられるということである。2.1. 節ですでに見たように、森山は、「基本的には」と断わっているものの、「AもAだ」は「XがXなら、YもYだ」や「XがXだし、YもYだ」の後半部分が独立したものであると述べている。だがその一方で、「教師も教師なら、学生も学生だ」や「教師も教師だし、学生も学生だ」といった従属節で「AもAだ」が用いられる例も挙げている。確かにこのような事例は、実際の発話文脈において用いられるので、「AもAだ」は、「XもXなら、YもYだ」や「XもXだし、YもYだ」の前半部分あるいは後半部分が独立したものと考えられる可能性も出てくるだろう。したがって厳密な意味で、「AもAだ」は「XがXなら、YもYだ」や「XがXだし、YもYだ」の後半部分が独立したものであるとは言い切れなくなってしまう。Okamoto も、従属節が「AもAだ」の例として、「男も男なら、女も女だ」((7)) を挙げているが、従属節が「AもAだ」である場合と「AがAだ」である場合の区別はしていない。

以上の考察は、従属節を伴う「AもAだ」について議論する場合、従属節が「AがAだ」と「AもAだ」ではどう違うのか、なぜ、このような2つの表現が可能となるのかを説明する必要があるように思われる。しかし、森山や Okamoto がこの点についてどのように考えているかは不明である。

2.3.2. 「AもAだ」の意味は何か？

以上、森山や Okamoto が扱う具体例が「AもAだ」という形式を持つデータの一部であることがわかった。その議論の過程からも明らかなように、彼らは「AもAだ」という言語現象をより深い視点から議論しようとしていたとは言えず、「AもAだ」の解釈プロセスに関する説明が不十分なところがある。次は、森山や Okamoto が意図する「AもAだ」の意味をできる限り明確にし、彼らの主張を反証する。関連性理論の考え方に従い、ここで考える「AもAだ」が持つ意味とは、「AもAだ」にコード化された意味、したがって、常に伴われる意味のことを指す。

すでに (5b)、(5c) で確認したように、森山と Okamoto の主張は、(i)「AもAだ」は、主語Aの指示対象が、「普通ではない (異常な)」、「望ましくない」といったマイナスの特性を持つことを伝達する、また、(ii)「AもAだ」は、主語Aの指示対象のほかにマ

イナスの特性を持つものが存在していることを前提とする、という点で共通する。要するに彼らは、「A も A だ」の意味は、マイナスの特性を持つものの並列であると考えているのである。このような意味に関する主張は、具体的な文脈の中で事例を考察する過程から得られるように思われるが、森山や Okamoto は、（ほぼ）具体的な文脈を示さず文脈から切り離された形で提示された例に基づいて、先に示した結論に至っている。なぜそのようなことが可能なのだろうか。その理由は、従属節を伴う「A も A だ」のいくつかが、マイナスの特性を持つものの並列を伝達する慣用句として用いられているからだと思われる。例えば、『大辞泉』によると、「親が親なら子も子」は、「親が悪事を働き、子もまた悪事を働いた場合、その親子を非難する言葉」である。当該表現が非難を示唆することは、日本語母語話者として直感的に理解できる。しかし、森山や Okamoto が主張するように、従属節を伴う「A も A だ」発話のすべてが、常に「普通ではない（異常な）」、「望ましくない」を意味するかどうか疑問である。Okamoto の分析によると、(7) の「男も男なら、女も女だ」は、男性と女性がともに望ましくないことを伝達するのに対して、(12) の「親が親だから子供も子供だ」の後半部分「子供も子供だ」は、親と同様、子供も立派ではないことを伝達する。確かにマイナスの意味という点では、「望ましくない」も「立派ではない」も同じであるかもしれない。しかし、(12) では、なぜ「A も A だ」の意味が「望ましくない」ではないのか、Okamoto の提案ではうまく説明することができない。私たちは、「A も A だ」という発話を聞いたとき、その発話から「普通ではない（異常な）」や「望ましくない」という以上により複雑で多様な内容を受け取る。そのような事実があるにもかかわらず、森山や Okamoto の提案は、従属節を伴う「A も A だ」発話のすべてが、常に「普通ではない（異常）」や「望ましくない」という意味を持つことを想定していると見なすことができるので、先に議論した (7)（「男も男なら、女も女だ」）と (12)（「親が親だから子供も子供だ」）のような、従属節を伴う「A も A だ」の解釈が文脈に応じて異なる理由を説明することができない。したがって、彼らの分析は支持できない。

ここで、森山や Okamoto が意図する「普通ではない（異常な）」、「望ましくない」の意味を確認しておこう。先に示したように、彼らは具体的な文脈の中で当該表現を分析していないので、私たちは、それらの例が実際にどのような点で普通ではない（異常な）、望ましくないと解釈されたかを再度検証することはできない。しかし、上記の二つの意味はどちらも、主語 A の指示対象と、それ以外のほかのものに対する話者の主観的なマイナスの評価を表している。したがって、本稿では、「A も A だ」は、主語 A の指示対象と、それ以外のほかのものが、話者にとってマイナスの評価を伴うものであることを意味する、と考える。

2.3.3.　考察対象外のデータに対する適用可能性

森山や Okamoto は、単独の「A も A だ」の例を考察の対象とはしなかった。だが、上

記で観察したように、「AもAだ」という形式を持つデータには、従属節を伴う「AもAだ」のほかに、単独の「AもAだ」がある。ここで、先に提示した、彼らの提案が単独の「AもAだ」をどれほどうまく扱えるのかという疑問に答えを出しておこう。

第一に、従属節を伴う「AもAだ」は、主語Aの指示対象がマイナスの特性を持つことを伝達すると言われていたが、下記に示したように、単独の「AもAだ」は、主語Aの指示対象がマイナスの特性を持つという意味をコード化しているとは言えない。

(13) そうそう。高濱さんとマーボーが、同じ日に同じ内容のブログを上げとってウケた。季節も季節だでね（笑）…
(http://blog.livedoor.jp/tek_nishi/tag/%E7%82%8A%E9%A3%AF%E5%99%A8)

(14) 時期も時期だ。流石にミンミンゼミとアブラゼミの大騒音は少なくなり、以前として吉田茂像広場の奥のサクラの大木にはたくさん張り付いているものの、ツクツクホウシが非常に多くなった。
(http://homepage2.nifty.com/poppobora/mushitori.html)

例えば、「高濱さん」と「マーボー」が同じ日（12月14日）にイルミネーションに関するブログを書いていたことが話題になっている状況において、(13) の「季節も季節だ」は、主語「季節」の指示対象である冬が、何らかのマイナスの特性を持つことを意味していない。同様に、(14) の「時期も時期だ」も、主語「時期」の指示対象である8月下旬が、何らかのマイナスの特性を持つことを意味していない。したがって、単独の「AもAだ」は、主語Aの指示対象がマイナスの特性を持つという意味をコード化している、と特徴づけることはできない。

次に、「AもAだ」がマイナスの特性を持つものの並列を意味するという点を考える。例えば、(15) は、マイナスの特性を持つものの並列を意味すると解釈されうる。

(15) [太郎は、取引先であるX社からのクレームを適切に処理することができなかった。そのために、X社が、契約破棄を申し出てきた。]
上司： ほんとに、あなたもあなたよ。なぜ一人で処理しようとしたの。言ってくれなければわからないでしょ。こんな大きなことになってしまったら、どうにもできないのよ。
太郎： 本当に申し訳ありませんでした。

(15) のような状況において、太郎はもちろんであるが、X社も非難の対象となりうるので、主語「あなた」の指示対象である太郎のほかに、マイナスの特性を持つもの、例えば、X社が存在していることを前提としている、と分析されるかもしれない。したがって、「あなたもあなたよ」は、マイナスの特性を持つもの（具体的には、X社と太郎）の並列を意味する例であると見なせるだろう。

もし「マイナスの特性を持つものの並列」という意味がコード化されているのであれば、「AもAだ」という表現形式は、常にその意味を持っていなければならない。しかし事実はそうではない。先行研究で提案された、マイナスの特性を表す具体的な意味を念頭に置きながら、以下の例について考えてみよう。

(16)　上司：［会議室で、時計を見ながら、］時間も時間だ。そろそろ始めようか。
　　部下：そうですね。

(16) の上司の発話「時間も時間だ」は、「会議を始める」という上司自身の判断に対する根拠を提示するものとして理解される。その根拠として、「主語「時間」の指示対象である発話時の時間が会議の予定開始時刻を過ぎている」こと以外に、例えば、「出席者が集まっている」ことや「話し合うべきことがたくさんある」ことなどが考えられるだろう。確かに、主語「時間」の指示対象である、予定開始時刻を過ぎた時間が「普通ではない（異常な）」というマイナスの特性を持つことを意味していると見なせるかもしれない。だが、(16) の発話状況において、主語「時間」の指示対象（予定開始時刻を過ぎた時間）以外のほかのもの、例えば、会議の出席者や会議の議題が「普通ではない（異常な）」というマイナスの特性を持つことを意味しているとは考えにくい。

同様に、「望ましくない」ものの並列という Okamoto の分析も、次のような例をうまく説明できない。

(17)　最近友達の結婚式に久しぶりに出たんですが、引き出物がこじんまりしていて、うんうんいつもの選ぶプレゼントだなーと思っていました。そしてお家に帰りついて袋の中を見てみたら、バームクーヘンと指輪の箱を少し長くしたような箱が一つ。この小箱に選べるギフトが入っているわけでもなし、指輪だったらすげー嫌だなーと恐る恐るあけるとなんととっても可愛いお花をイメージした熊野の化粧筆！　おー時期も時期だもんな！　とちょっとテンションがあがりました！　(http://wa.chobirich.com/qa/show/2893)

(17) は、結婚式の引き出物に関する質問の一部である。この質問が投稿された当時、ワールドカップで優勝した日本女子サッカーチームに、国民栄誉賞と副賞の熊野の化粧筆が贈られていた。このような状況において、「時期も時期だ」は、主語「時期」の指示対象である発話時が、「望ましくない」というマイナスの特性を持つことを意味しているとは言えない。このように、マイナスの特性を持たないものの存在が明らかになった場合、(17) を、「望ましくない」といったマイナスの特性を持つものの並列を意味するものとして分析できない。

以上のような考察は、単独の「AもAだ」は、森山や Okamoto がいう「マイナスの特性を持つものの並列」という意味をコード化していると特徴づけることができないことを

示している。

3. 「AもAだ」のデータ

前節の先行研究検証において、森山やOkamotoが扱う事例が、「AもAだ」という形式を持つデータのほんの一部であることを明らかにした。この考察結果から、彼らの提案は「AもAだ」の総合的な説明と見なすことはできない。では「AもAだ」という表現形式はどのような意味をコード化しているのだろうか。まず具体的な文脈の中で「AもAだ」のデータを観察すると、その解釈には3つの要素がかかわっているように思われる。今仮に、P「発話時点で話題になっていること」、Q「文脈にすでに存在している想定」、R「「AもAだ」という発話が呼び出す想定」とし、次の(18)、(19)の例がどのように解釈されるかを見てみよう。

(18) 妻： 太郎君がまたクラスメイトとけんかしたんだって。ほんとに、やんちゃな子よね。
夫： まあ、親も親だからな。 (=(9))

(19) 「僕は弟なんですよ。しかも実の。僕にまでやきもちやいて、姉を遠ざけておくことはないでしょう。どうせ、家の中にいるってことはわかっているんですよ。よし、僕がひっぱり出してくるとしよう。姉も姉ですよ。いつまでたっても、あなたの言いなりになっているんだから。」
(小池真理子「彼女を愛した俺と犬」『第三水曜日の情事』)

例えば、(18)の夫の発話は、P「太郎がクラスメイトとけんかをした」のは、Q「太郎がやんちゃである」し、R「父親がもめごとをよく起こす」からだ、と解釈される。(19)は、ある男性が、姉の夫である義兄に対して発した発話である。義兄はとても嫉妬深く、実の姉弟である自分の妻と話し手を会わせようとしない。そうすると、「姉も姉ですよ」という発話は、P「話し手(姉の家を訪ねた男性)が姉に会えない」のは、Q「義兄がとても嫉妬深い」し、R「姉が義兄(姉から見れば夫)に気を遣いすぎている」からだ、と解釈される。これらの例を見ていると、Q、Rは、なぜPという出来事が起こったのか、その理由を説明していると考えられる。

しかし、次のような例では、Q、Rが、Pに対する理由づけであるとは見なせない。

(20) 上司： [会議室で、時計を見ながら、]時間も時間だ。そろそろ始めようか。
部下： そうですね。 (=(16))

(20)の上司の発話は、P「会議を始める」ことが適切だと判断したのは、例えば、Q「出席者が集まっている」し、Q′「話し合うべきことがたくさんある」ということだけではな

く、R「発話時の時間が会議の予定開始時刻を過ぎている」という根拠があるからだ、と解釈される。このような場合、Q、Q′、Rは、どのようにしてPという判断に至ったのか、その根拠を説明していると考えられる。また、(20) では、先に考察した (18)、(19) の例とは異なり、Qに該当するものが広範囲にわたっていくつか引き出される可能性があるように思われる。

さらに、(21) では、Qに該当するものを明確には特定できない。

(21)　杉山邦博や内館牧子はどの場所で顔を見ても驚かないが、毎回荒れる3月の大阪場所は大村昆、林家ペー、京唄子などは常連なので楽しみだ。知らなかったのだけど、料理人の神田川俊郎は正面勝負審判席の間に座っているという。場所も場所だ。皇室でさえ安全を考えてタマリ席には座れない。人柄が偲ばれるところだ。　(= (10))

(21) の「場所も場所だ」は、P［相撲好きの有名人の中でも、神田川俊郎は相撲がとても好きだ］と判断したのは、Q［？］、R［タマリ席は臨場感はあるが危険を伴う］という根拠があるからだ、と解釈される。このような例では、先に示した (18)-(20) の例とは異なり、読み手によっては、Qに該当するものを具体的に探し出すことに対してあまり自信を持てない場合があるように思われる。

本節では、「AもAだ」が具体的な文脈の中でどのように解釈されるかを考察した。次節では、関連性理論の観点から、それらの考察に対して統一的な特徴づけを試みる。

4. 「AもAだ」の意味規定

このような一見雑多に見えるデータを見て、まず第一に気づくことは、「Q、Rそれぞれが、Pに対する何らかの説明を与えるものの一つ」として解釈されるということである。より具体的に言えば、Q、Rそれぞれが、「なぜPが起こったのか」、「どのようにしてPという判断に至ったのか」ということに対する応答の一つとして理解されるということである。ここで注意すべきことは、Q、Rは、Pよりも時間的に先に起こったことだと理解されるということである。つまり、Q、RとPの間では逆行的な関係性が成立しているのである。だからこそ、「AもAだ」を解釈する場合、記憶などからQ、Rに該当するものを呼び出してくるということが必要になるのである。発話解釈プロセスという視点から再考すると、「AもAだ」という表現形式は、聞き手にそのような解釈の仕方をせよという指示を与えることによって、解釈の推論的側面に制約を課している、と考えられる。

次に気づくことは、先に述べた発話解釈の推論的側面に対する制約において、Rは、Pに対する何らかの説明を与えるものとして強く引き出されるのに対して、Qにはさまざまな強さを持つものがあるということである。例えば、(18)（太郎がけんかをした例）の

聞き手は、比較的容易に特定のQ（「太郎がやんちゃである」こと）を強く引き出すことができる。一方、(20)（上司が会議の開始を促す例）の聞き手は、一定の範囲にあるいくつかのQ（「出席者が集まっている」、「話し合うべきことがたくさんある」）を引き出すことができるが、その確定性は（18)、(19）の場合に比べて低い。また、(21)（大相撲の例）に関しては、先の（18)-(20）に比べて明らかに強く引き出されるQは存在しない。読み手は、広い範囲にわたる非常に確定度の低い想定の中からQに該当するものを引き出すことになる。まず大相撲に詳しい人であるならば、例えば「神田川俊郎」に関する百科事典的情報にアクセスして文脈を拡大し、「神田川俊郎は、以前テレビ番組で大相撲について熱く語っていた」といった想定が得られるかもしれない。一方、大相撲に詳しくない人は、Qに該当するものを引き出すのは困難であるかもしれない。

以上の考察から、Qにはさまざまな強さを持つものがあり、「AもAだ」が発せられた場合、Qとして特定の想定が、常にRと同程度に強く引き出されると決まっているわけではないと言える。このように、「AもAだ」の例においては、聞き手側にQに該当するものを引き出す責任の多くがあるので、聞き手は、当該発話文脈を拡大できなければ、話し手がどのようなQを伝達しようとしたかを特定することが難しくなってしまう場合がある。しかし、強いものから非常に弱いものまで、さまざまな強さのQの存在を示唆するという考察結果を踏まえると、「AもAだ」は、「Pに対する説明を与えるものの一つとなるようなRを呼び出す」ことを指示している、と言える。このように考えると、先に考察したすべての例を統一的に扱うことができる。(18）の夫の発話「親も親だ」は、P「太郎がクラスメイトとけんかをした」ということに対する説明を与えるものの一つとなるような、R［父親がもめごとをよく起こす］という想定を呼び出すことを指示している、と分析される。同様に、(21）の「場所も場所だ」は、P［相撲好きの有名人の中でも、神田川俊郎は相撲がとても好きだ］ということに対する説明を与えるものの一つとなるような、R［タマリ席は臨場感はあるが危険を伴う］という想定を呼び出すことを指示している、と分析される。

今まで、「AもAだ」がどのように解釈される表現形式であるかを示すために、仮にPを「発話時点で話題になっていること」、Rを「「AもAだ」という発話が呼び出す想定」として、議論を進めてきた。ここで改めて、P、Rがどのようなものであるか正確に定義しておきたい。

まず、Pについて考えてみたい。例えば、(18）のP「太郎がクラスメイトとけんかをした」は、対話相手である妻の発話に基づくものである。一方、(19）のP「話し手が姉に会えない」は、実際に発せられた先行発話に基づくものではなく、先行状況に基づくものである。(20）のP「会議を始める」は、話し手である上司自身の発話（「そろそろ始めようか」）に基づくものである。以上より、Pは、先行発話や先行状況の場合もあれば、話し手自身の発話の場合もあり、さまざまである。だが、それらはみな、「発話時点で話題に

なっている事象」だと言える。例えば、(18) のP「太郎がクラスメイトとけんかをした」は、発話時点で話題になっている事象である。

次に、Rは「「AもAだ」発話が呼び出す主語Aの指示対象に関する想定」と一般化できるであろう。例えば、(18) のRは、「父親がもめごとをよく起こす」ことである。これは、「親も親だ」という発話が呼び出す、主語「親」の指示対象である太郎の父親に関する想定である。同様に、(20) のRは、「発話時の時間が会議の予定開始時刻を過ぎている」である。これは、「時間も時間だ」という発話が呼び出す、主語「時間」の指示対象である発話時の時間に関する想定である。

上記の考察に基づき、「AもAだ」の意味を (22) のように規定する。

(22) 「AもAだ」は、発話時点で話題になっている事象 (P) に対して説明を与えるものの一つとなるような、主語Aの指示対象に関する想定 (R) を呼び出すように処理されることを要求する。

このような規定を踏まえると、「AもAだ」という発話によって伝達されるRは、表意というより推意であると見なされる。

上記 (22) の規定は、次のような容認性の違いを容易に説明する。会議室で上司が部下に対して発話しているとしよう。(23a) のように、「プロジェクターもプロジェクターだ」に「会議を延期しよう」が後続すれば容認されるが、(23b) のように、後続部分を「会議を始めよう」に置き換えると不適切になるように思われる。[3]

(23) 上司：　a. プロジェクターもプロジェクターだ。会議を延期しよう。
　　b. #プロジェクターもプロジェクターだ。会議を始めよう。

(23a) が容認可能であるのは、「会議を延期する」という事象 (P) に対して説明を与えるものの一つとなるような、主語「プロジェクター」の指示対象に関する想定 (R) として、例えば、「会議室のプロジェクターがうまく作動しない」という想定がアクセス可能であるからである。一方、(23b) が不適切であるのは、「会議を始める」という事象 (P) に対して説明を与えるものの一つとなるような、主語「プロジェクター」の指示対象に関する想定 (R) がアクセス困難であるからである。つまり、普通の日常生活では、例えば、「プロジェクターが作動する」ということはごく当たり前のことであり、「会議を始める」という判断を下す際の大きな根拠の一つとなるようなものが、普通私たちが持っている「プロジェクター」に関する知識に存在せず、アクセスできないので、不適切になると説明される。

[3] (23) の例は、査読者の一人が提示した例に対して、筆者が具体的な文脈を設定したものである。

5. 表現形式が意味を持つという主張の妥当性

「AもAだ」が（22）で規定したような、推意形成に関わる手続き的情報をコード化しているならば、「AもAだ」の意味は、それを構成する各構成要素の意味を足し算することでは得られないことになる。本節では、「AもAだ」という表現形式そのものがある特定の意味を持つという仮説を立て、その仮説に対する反論を想定し、「AもAだ」の意味が合成性の原理では導き出せないことを明らかにする。

「AもAだ」という表現形式そのものが、当該表現中の単語の意味の足し算から独立したある特定の意味を持つという仮説への反論として、まず「AもAだ」と形式的に類似する「AもBだ」[4] からの類推に基づく二つの反論が考えられる。一つ目の反論は、形式的な類似性に基づき、「AもAだ」の意味は、「AもBだ」の場合と同じように解釈されるはずだ、というものである。この反論に答えるために、まず「AもBだ」がどのように解釈されるかを確認したい。例えば、「春子もピアニストだ」は、「「春子」によって指示される人物もまた、「ピアニスト」という集合の成員であり、その集合の成員が持つ典型的な特性（例えば、「ピアノを演奏する音楽家」）を持つ」ことを伝達すると考えられる。このような考え方に従えば、「AもBだ」と形式的に類似する「AもAだ」も、「主語Aの指示対象もまた、述語Aが指し示す集合の成員であり、その集合の成員が持つ典型的な特性を持つ」ことを伝達する、ということになる。だが、そのような考えは支持できない。例えば、もし（18）（太郎がけんかをした例）の「親も親だ」が、「AもBだ」の場合と同じように解釈されるのならば、主語「親」の指示対象である太郎の父親もまた、述語「親」が指し示す集合の成員であり、その集合の成員が持つ典型的な特性（例えば、「子供を養育する」、「厳格である」）を持つと解釈されるはずである。だが実際は、先に示した文脈において、「親も親だ」という発話は、「父親がもめごとをよく起こす」と解釈される。これは、「AもBだ」と同じ解釈プロセスに基づくものではない。なぜならば、当該発話は、主語「親」の指示対象である太郎の父親が、述語「親」が指し示す集合の成員であるかどうかを問題にしておらず、また、太郎の父親が有する「もめごとをよく起こす」という特性は、「親」という集合に属する成員が持つ典型的な特性とは考えられないからである。(19)-(21) も同様に説明できる。したがって、「AもAだ」は、「AもBだ」と同じように解釈されるとは言えない。

二つ目の反論として、上記（22）に示した「AもAだ」の意味は、「AもBだ」の場合と同様、主語Aの指示対象以外のものに関することを示唆しているので、当該表現に含まれる「も」の意味から得られる、というものが考えられる。だが、この反論も的外れで

[4]「AもBだ」において、A、Bはともに、名詞あるいは名詞句を意味する。

ある。ここで、(18)（太郎がけんかをした例）の「親も親だ」と「春子もピアニストだ」をもう一度比較してみよう。前者の場合、例えば、「父親がもめごとをよく起こす」こと以外に、「太郎がやんちゃである」ことを伝達している。これら二つの想定はそれぞれ、「太郎がクラスメイトとけんかをした」という事象に対して説明を与えるものの一つとなるようなものと解釈される。一方、後者の場合も、明示される「春子」以外の存在を示唆しており、例えばその人を夏子と呼ぶことにすると、「夏子がピアニストである」と推論することは可能である。しかし、この発話から、「春子がピアニストである」ことと「夏子がピアニストである」ことを、ある事象に対して何らかの説明を提供するものの一つとして解釈しなければならないという推論に関わる事柄は導き出されない。このように、「AもAだ」の場合は、何らかの説明を提供するものとして解釈されなければならないという推論に関わる観点から特徴づけられるのに対して、「AもBだ」の場合は、そのような観点から特徴づけることができない。したがって、(22) で規定した「AもAだ」の意味は、当該表現に含まれる「も」の意味だけでは説明できず、「AもAだ」という表現形式そのものから得られるものだと言える。

以上のような議論は、(22) に示した「AもAだ」の意味が、「AもBだ」と同じように、それを構成する各構成要素の意味を足し算することによって得られたものではないことを明確に示しており、「AもAだ」という表現形式そのものが、当該表現中の単語の意味からは独立したある特定の意味を持つ、と結論づけられる。これは、「AもAだ」という表現形式が意味を持つという仮説の妥当性を示している。

上記二つの反論は、「AもAだ」と形式的に類似する「AもBだ」からの類推に基づくものであった。さらに、関連性理論の観点からも、次に示す二つの反論が考えられるかもしれない。もし「AもAだ」という表現形式そのものが、上記 (22) のような意味をコード化し、推意形成に関わる推論への手続き的制約を課していると主張するならば、「AもAだ」の解釈が、アドホック概念形成や自由拡充という表意形成に関わるプロセスよって得られないことを明らかにしておかなければならない。

まず、「AもAだ」の解釈が、アドホック概念形成[5]によって得られる可能性について考えてみよう。「AもAだ」の解釈はアドホック概念形成により得られると考える者は、先に議論した (18)-(21) における述語Aという語彙に、‘＊’をつけて示されたアドホック概念が関わっている、と主張するかもしれない。例えば、(18)（太郎がけんかをした例）の「親も親だ」という発話に関して、述語「親」という語彙を用いて話し手が伝達しようとしていることは、語彙的にコード化された概念である「親」ではなく、むしろ語彙概念

[5] アドホック概念形成とは、表意形成に関わる語用論的プロセスの一つであり、ある語彙概念が、文脈に合うように語用論的に調整されその場限りの概念に取って代わるプロセスのことを指す。

が語用論的に調整された「親*」であると考え、その語用論的に調整された概念は、例えば、「もめごとをよく起こす親」である、と主張するかもしれない。このような概念は、一見すると文脈に合うように調整されたかのように思えるが、これをアドホック概念と見なすべきではない。なぜならば、アドホック概念形成によって得られる可能性のある解釈の範囲は、当該語彙に単語の意味として元々コード化されている概念に関する聞き手の語彙知識及び百科事典的情報によって制限されているからである。確かに、(18)-(21) における述語Aという語彙は、単語の意味としてコード化されている厳密な概念を伝達してはいない。さらに言えば、そのAという語彙に単語の意味としてコード化されている概念に関する百科事典的情報さえも伝達してはいないのである。「AもBだ」との形式的な類似性に基づく第一の反論に関する議論の中ですでに述べたように、述語「親」に関する百科事典的情報には、例えば、「子供を養育する」、「厳格である」といったものが含まれている。しかし、「もめごとをよく起こす親」のような概念は、先に示した「親」に関する百科事典的情報とはかなりかけ離れている。それは、(18) のような文脈において「親も親だ」という発話によって伝達される想定が、「親」という語彙概念が語用論的に調整された結果得られた概念を伝達していると解釈される想定ではなく、当該文脈における主語「親」の具体的な指示対象に関する百科事典的情報から得られたものを伝達していると解釈される想定だからである。(18) の話し手は、聞き手が、主語「親」の指示対象である太郎の父親に関する想定を引き出すことを意図していたのである。「親も親だ」という発話が呼び出す想定R「父親がもめごとをよく起こす」は、その発話そのものが、発話時点で話題になっている事象に対して説明を与えるものの一つとなるような、主語「親」の指示対象、つまり、太郎の父親に関する百科事典的情報を記憶から呼び出すように仕向けることによって初めて得られるものなのである。同様の特徴づけが、他の例にもあてはまる。

次に、「AもAだ」の解釈が、自由拡充[6]によって得られる可能性について考えてみよう。「AもAだ」の解釈は自由拡充によって得られると考える者は、先の (18)-(21) の発話は、特定の言語要素の要求ではなく、純粋に語用論的に何らかの要素を補って理解される、と主張するかもしれない。例えば (18)（太郎がけんかをする例）の「親も親だ」においては、自由拡充によって、「もめごとをよく起こす」という部分が加えられ、「太郎の父親も［もめごとをよく起こす］親だ」と解釈されうる。もちろん、このような解釈は、太郎の父親が、もめごとをよく起こすということを意味するが、さらに言えば、「もめごとをよく起こす親」という特性を持っている人物がほかに存在していることも示唆しているのである。しかし実際は、(18) のような文脈において、そのような解釈が引き出される

[6] 自由拡充とは、表意形成に関わる語用論的プロセスの一つであり、特定の言語的要素の要求ではなく、純粋な語用論的要求によって、何らかの要素を補うプロセスのことを指す。

ことはない。もし当該発話によって、そのような読みが生じると仮定してしまうと、話し手がその発話によって伝達しようと意図していたこと以外のものが引き出されてしまうので、3節で示した（18）の解釈をうまく説明することができない。(19)-(21) も同様に分析される。

以上の考察から、「AもAだ」の解釈が、アドホック概念形成や自由拡充のような表意を形成する語用論的プロセスによって得られるものではないと結論づけられる。これは、「AもAだ」は、推意派生に貢献する手続き的情報をコード化した表現形式であるという主張を強力に支持するものである。

本節での考察から、「AもAだ」の解釈は、それを構成する各構成要素の意味に基づき完全に予想できるものではないことがわかった。これは、「AもAだ」という表現形式そのものが (22) のような手続き的意味をコード化していることを裏づけている。

6. 結論

本稿では、関連性理論の概念を用い、「AもAだ」という表現形式が持つ意味について考察した。森山（1989）やOkamoto（1993）は、従属節を伴う「AもAだ」の意味は、「普通ではない（異常な）」、「望ましくない」といったマイナスの特性を持つものの並列であると主張する。だが彼らが扱うデータは、「AもAだ」という形式を持つデータの一部であり、「AもAだ」の総合的な説明とは見なせない。本稿は、「AもAだ」発話の解釈プロセスに関する議論の出発点として、他の文に埋め込まれることなく単独で生起する「AもAだ」を考察対象とし、「AもAだ」は、「発話時点で話題になっている事象に対して説明を与えるものの一つとなるような、主語Aの指示対象に関する想定を呼び出すように処理されることを要求する」表現形式であると規定した。

「AもAだ」のような名詞句トートロジーは、一見すると聞き手に対して新しい情報を何も与えていないように思われるが、実際には、有意味なものと解釈される。このような一見すると無意味に思えるものが有意味に解釈されるのは、当該表現が、どのように解釈すれば無駄な労力を使わずもっとも関連性のある解釈にたどり着くかに関する情報、つまり手続き的情報をコード化しているからだ、と考えられる。これまで、関連性理論の枠組みでは、表現形式のような語（句）以外のものに手続き的情報がコード化されている可能性についてあまり議論されてこなかった。だが、本稿で得られた「AもAだ」に関する結論は、表現形式を推論処理の仕方に制約を課す手続き的情報をコード化する単位とする分析の妥当性を示している。

参照文献

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

松村明（監）. 2012.『大辞泉』東京：小学館.

森山卓郎. 1989.「自同表現をめぐって」『待兼山論叢』23: 1-13.

Okamoto, S. 1993. "Nominal Repetitive Constructions in Japanese: The 'Tautology' Controversy Revisited." *Journal of Pragmatics* 20: 433-466.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995[2]. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

引用作品

小池真理子. 1985.「彼女を愛した俺と犬」『第三水曜日の情事』東京：角川書店.